

翻刻書陵部蔵花園院御製 (光嚴院御集)

原 田 芳 起

序・凡例

書陵部蔵花園院御製一冊は、正しくは光嚴院御集である。続群書類従四二五巻に光嚴院御集として収めているのが正しい。列聖全集解題・皇室御撰解題等で、光嚴院の御集にあらずと断定して以来、その真実を見失われて来た。この百六十五首の御集を、花園院御集と誤認し、勅撰集等の花園院の御製を増補改編したものが、書陵部蔵花園院御集二四九首本(列聖全集底本)である。二四九首本が先に成つて一六五首本は略本であるとするのは、明らかに考証の誤であつた。詳細は、群書解題第十および、雑誌史学文学第三巻一号の拙稿を参照せられたい。

歴代御製集(国民精神文化研究所)を始め、種々の書に、光嚴院の御製を花園院のそれとして収めたり引例したりされて来た。きわめて個性的な光嚴院の作品・作風は見失われ、花園院の作風に対する批評も同時に混濁せざるを得なかつた。当然、すみやかにその正に帰らねばならない。

続類従本は、若干の脱字や、誤写もしくは誤植かと思われ

るところがある。書陵部本の方が本文の信頼性は大きい。ここに宮内庁書陵部の御許可を得て翻刻を試みるゆえんである。

皇室御撰解題以来、二四九首本の考証に終始したために、逆の結論に達したと思われる。この一六五首本に六首の光嚴院の風雅集所出歌があることを取上げるだけでも、推論は根本的に変つていたはずである。

帰結だけ摘要すると、この一六五首の集は、明らかに光嚴院の作品で、おそらく風雅集の撰集に先立つる短い時期の詠草で、その中から六首が風雅の選に入つた。あれこれの資料から集めたものでなくて、連続的に創作されたなまの詠草である。きわめて自由な詠みぶりや、全体の構成からもそれは察せられる。字余り句を好んで用いてあるが、その頻度がなみなみならぬものがある。稚拙をいとわぬ点もある。総じて若さがいちじるしく認められる。そのような点から、この詠草は、一つのまとまつた群として鑑賞することが適正な方法である。これも翻刻を試みる理由の一部である。

文字遣はすべて書陵部本のままとする。動詞を表記する漢字の送り仮名を欠くものなどはいささか不便だが、これが中世の文字遣であつたのであるからそのままとする。誤字と見られるところが数箇所あるが、これもそのままにし、他の本と対校することで補う。類従本と対校したところは、類従本が誤と見られるものも右側にルとして示す。書陵部蔵の二四九首の花園院御集に包含されるところは、同系らしいので、列聖全集御製集第三卷所収の本文によつて異文があれば示す。これはどちらかが文字の誤認による写しちがいがある場合がほとんどである。

異体の仮名や、漢字の字体は現行の普通の体に改める。

底本には、作品中風雅集所出歌の右肩に小さく風と注しているが、六首中三首だけそれがあるので、底本にあるものはゴチ体で風とし、残る三首は「」でかこんで風とする。

列聖全集御製集の略記はしとする。

濁点は底本にしたがつて付けない。

頭にアラビヤ数字で通し番号を付けたのは研究の便宜のためである。

花園院御製(光厳院御集ル)

春

霞

1 よもの梢かすむを見ればまたきより花の心そはや匂ひぬる

鶯

2 春をへていかなる声に鳴なればはつ鶯のいやめつらなる

梅

3 わかなかめなにゆつりて梅花さくらもまたてちらむとすらむ

柳

4 夕暮の春風ゆるみしたりそむる柳かすゑはうこくともし

春

5 春の日のとけき空はくれかたみいたつらにきく鶯の声

春雨

6 浅緑みしかき草の色ぬれてふるとしもなき庭の春雨

7 長閑なるむつきの今日の雨のをとに春の心そ深くなりぬる

8 花も見すとりをもきかぬ雨のうちのことよひの心何そ春なる

9 夕霞かすみまさとみるまゝに雨に成ゆく入あひのそら

10 何事をうれふとなしにのとかなる春のあま夜は物そ佗しき

き

花

11 散ことはやしと思ふを桜花ひらくる程のあやに久しき
12 軒ふかき花のかほりにかすまれてしらみもやらぬ宿の曙
13 くれかゝる花のほひをしたひかほにさらにつるふ夕

日影哉

夏

郭公

14 なれも又此夕暮を待けりな初ねうれしき山ほとゝきす
15 思ふ事ありあけの空の時鳥わか為とてやいまき鳴らむ

夏

16 夏山や木たち涼しき村雨のゆふへを時となくほとゝきす

夏昼

17 庭のうへのまさこにみちてゝれる日のかけみるなへにあ
つやまされるりよん

夏夕

18 蚊遣火のけふりまさると見程にくれぬるならし入あひの
声

夏夜

19 秋の夜をさひしきものと何か思ふ水鶏こゑするよひの月
影

夏月

20 更る夜の庭のまさこは月しろし木蔭のゝきに水鶏声して

照付

21 ともしするほくしの松のつきもあへす葉山か峯は雲明ぬ
也

夕立

22 吹すくる梢の風のひとほらひこえまで涼しよその夕立

遠近夕立

23 とをつそらにゆふたつ雲を見なへにはや此里も風きほふ
也

螢

24 とふ螢ともし火のこともゆれとも光をみれば涼しくもあ
るか

秋

初秋

25 花もまたき草の籬のあさはらけ露のけしきに秋は来にけ
り

26 世の色のおはれはふかく成行よ秋はいくかもしまたあら
なくににけり

27 夕日さす梢の色に秋見えてそとの森にひくらしの声

28 秋はまたあさけの庭の池の面にはやすさましき水の色哉
29 秋になるねさめそいとゝうれはしき物おもふ身にはあり
もあらずも

30 いとはやも風すさましみそれとなき虫も籬にやゝ鳴たちぬ
時わかぬ竹のさ枝に吹風のをとしも秋に成にけるかな

七夕

32 目にちかき面影ながら年もへぬ雲井の庭の星合の秋
33 おほかたの秋てふ秋のなかき夜をこよひともかな星合の
空

萩

34 身こそあらめ花は昔をわするなよ馴し戸くちの庭の秋萩

萩

35 秋風の、き葉の萩よなにそのうれへのたねを植置にけ
る

薄

36 ほにいて、我のみまねく糸薄くる人あれなふるさとのあ
き

秋

37 秋風によはき尾花はうこけとも月にのとけみふけすめる
夜半

秋夕

38 物ごとに我をいたむるゆへはあらし心なりけり秋のゆふ
暮

39 しつむ日のよはき光はかへにきえて庭すさまじき秋風の
暮

菊

40 咲やうてしはしもあれな庭の菊待へき花の又もあらんく
に

虫

41 夜をさむみいねすてあれは月影のくたれるかへにきり
くす鳴

月

42 くる、空に待つるまゝのなかめよりすたれをろさぬ月の
よすから

43 てらすらん千里の人の秋の思ひ月にやうつす影のかなし
き

冬

時雨

44 木の葉ぬれてそゝくともなき村時雨さすや夕日のかけも
さなから

落葉

45 木葉こそもろくもならめ夕嵐我なみたさへたえすも有哉
よりん

冬

46 さむからし民のわらやを思ふにはふすまのうちの我もは
つかし

47 よはさむみ嵐の音はせぬにしもかくてや雪のふらんとす
らん

48 雪はまたきた、冬枯の草の色の面かはりせぬ庭そさひし
き

49 冬をあさみまたこほらねと風さえてさ、波寒き池の面哉
冬あさみ

- 50 散まかふるまよふ木葉にもろき音よりも枯木吹とをす風そさひし
き
- 51 霜にとほる鐘のひゞきを聞なへにねさめの枕さえまさる
也
- 52 霜のをくねくら梢さむからしそともの森に夜からすの鳴
雲こほる木すゑの空の夕附よ嵐にみかく影もさむけし
- 53 空はしもくもるとは見えぬ朝明のしもにかすきるルうすきる世の気
色哉
- 54 この夜半やふげやしぬらん霜ふかき鐘のをとして床さえ
まさる
- 55 冬枯の草木の時をあはれとやはなをあまねくふれる白雪
冬草
- 56 それと見えし霜のくち葉も猶落てふる枝はかりの庭のは
き原
- 57 冬暁
- 58 あかしかぬる時雨のねやのいくねさめさすかに鐘ソルの声も
きこゆる
- 59 かけうすき有明の月に鳴鳥の声さへしつむ霜のをち方
霜にくもるありあけかたの月影にとをちの鐘もこゑしつ
む也
- 冬曙
- 60 ひゞき残るとをちの鐘はかすかにて霜のかすきるルにうすきる曙のそ
ら
- 61 冬朝
- 62 おきてみねど霜ふかゝらし人のこゑのさむしてふきく
も寒き朝明
- 63 夜もすから雪やおもふ風の音に霜たにふらぬ今朝のさ
むけさ
- 冬夕
- 64 嵐吹あられこほるゝけふの暮雪の心やちかつきぬらし
霜かれのをはななか庭に風ふれてさむき夕日はかけさえぬ
なり
- 冬夜
- 65 星きよき木すゑの嵐雲晴て軒のみ白きうす雪の夜半
冬月
- 66 空のうみ雲の波もやこほらん夜わたる月の影のさむけ
き
- 67 霰
- 68 さえくらすあらしに雪やちかゝらしさきたつ霰軒ををつ
なり
- 雪
- 69 雲のゆふへ嵐のこよひふりそめぬ明なは雪のいくへかも
見む

70 野山みえル皆草木もわかす花のさくゆきこそ冬のかさり成けれ
朝日さす松のうれよりをつる雪にきえかたにしもつもる

木のもと

暁雪

72 ふりうつむ雪の野山は夜ふかきにあくるかどりのとを里
の声

曙雪

73 目にちかき軒のうへよりしらみそめて木すゑかほれる雪
の曙

朝雪

74 うつりにほふ雪の梢の朝日影今こそ花の春はおほゆれ

風前雪

75 吹みたしはらひもあへぬ竹の葉の風のうへにつもるしら
ゆき

夜雪

76 軒の上はうす雪しろしふりはるゝ空には星のかけきよく
して

雨後雪

77 けさの雨のなこりの雲やこほるらんくれゆく空の雪に成
ぬる

山雪雲ル

78 岩も木もすかたはさすか見えなからをのか色なき雪の深

山へ

野雪

79 なかめやるかきりも見えずかすみゆく野原か末は雪とし
もなし

浦雪

80 浪の上はあまきる雪にかきくれて松のみしろき浦の遠方

杜雪

81 雪にたにつれなくてやは山城のとき葉の森も色かはる也

山家雪

82 人はとはぬみやまの庵にあはれ猶ところもわかすふれる

白雪

田家雪

83 すゑとをきかり田のおもの雪の中にたてるや庵の見もさ
ひしき

閑居雪

84 軒の松にかよふ嵐の音たにもたえていくかの雪のふるさ
と

社頭雪

85 たのむゆへのふかき心はへたてぬをいつかみかさの山の
しら雪

松雪

- 86 ときは木のその色となき雪の中も松はまつなるすかたそ
みゆる
- 雪中鳥
- 87 降つもる雪の梢にゐる鳥の羽かせもをしき庭の有明
あさあけレレ
- 雪中獣
- 88 起いてぬねやなからさく犬のこゑのゆきにおほゆる雪の
あさあけ
- 雪中懐旧
- 89 むかしをほうつみや残す白雪のふりにし世のみうかふお
もかけ
- 雪中述懐
- 90 いたつらにふる白雪をあつめもたぬわか光なみ世さへく
もれる
- 炭竈
- 91 立のほるけふりの末をあはれともたれかはとはむをのゝ
炭竈
- 除夜
- 92 年くると世はいそきたつ今夜しものとかにものゝあはれ
なる哉
- 恋
- 初恋
- 93 しらさりしななめやなにそよしなしに物おもふ身にはな
- 94 らしと思ふを
- 忍恋
- 94 人まなみたゝにはいはぬその色を見しらぬにして過ん
とやする
- 不逢恋
- 95 我はおもひ人にはしるていとはるゝこれを此世のちきり
なれとや
- 【風】
- 待恋
- 96 あすのうさも我心からかなしきにこよひよ今夜とへやと
そおもふ
- 互忍待恋
- 97 待もとふもつゝむにふくる時のまよあちきながらぬ一夜
ともかな
- 別恋
- 98 これ程も又はいつかの別路をくれよのちよのやすのたの
めや
- 偽恋
- 99 いまそおもふたのみしうちのいくちはれかさるかうへの
なざげ也ける
- 誓恋
- 100 うきかうへになくそ猶もあはれなるちかひし末を人の
為とて

- 108 恋獣
思ひつくす思ひのゆくゑつくくと涙にソレおつる燈のかけ
- 107 恋
思ひつくしあはれに物のなりたちてすへて涙のおちもとナシル
まらぬ
- 106 恋恨
あさくしもなくさむる哉と聞からにうらみの庭ぞ猶ルふか
くなる
- 105 恋契
うしとすつる身をおもふにも更に猶あはれなりける人のレ
契りよ
- 104 恋契
こひあまり我なく涙雨とふるやこのくれしもの雲とつる
空
- 103 恋涙
我やたそあやしやつるにたえはてはあらしと思ナシルふをけふ
まての身よ
- 102 絶恋
うきにたえすうらむれは又人も恨ちきりのはてよたゝか
くしこそ
- 101 恨恋
をしや我もあはれかなしのいくふしをひとつうらみのう
ちになしぬる
- 116 寄雨恋
いもかうへにおもひうらふれねすてあかす此夜すからの
雨の音はも
- 115 寄風恋
なにそこのうはの空より吹風の身にあたるさへ物のかな
しき
- 114 寄夕恋
にしの山にくたる夕日の影みればけふはたくれぬ妹をみ
なくに
- 113 寄朝恋
如何になるけさのなかめそこよひ我みるとしもなきゆめ
のなこりに
- 112 寄曉恋
今も此有明のそらに鳥はなけとわかれし人にまたあはぬ
哉
- 111 寄冬恋
とちつもる氷も雪も冬のみをとけむこもなき我思ひ哉
- 110 寄春恋
いろねにもうれへのすゝむたねとして我に物うき花鳥コサキ
の春
- 109 寄春恋
里の犬のこゑをきくにも人しれすつゝみし道のよはそ恋
しき

- 117 寄霜恋
あさ霜のむすひもはてぬ契ゆへさてこそけなめ知人をな
み
- 118 寄煙恋
我恋よけふりもせめてたちなゝんなひかぬまでも君に見
ゆへくきん
- 119 寄山恋
あはれ今はかくて契やつくは山しけきうらみの我もそふ
比
- 120 寄松恋
人やうきさもいはしろのむすひ松むすはぬ世々の身の契
りこそ
- 121 寄庭恋
妹待と時そともなきなかめして蓬か庭も霜かれにけり
寄苔恋
(欠字ル)
- 122 寄鶏恋
そのまゝにはらはぬ庭の苔の色にたえにし人の跡も見え
けり
- 123 寄鳥恋
わかれましつらからましと聞もつらし八こそゑの鳥の明方
のこそ
- 124 寄鳥恋
月に鳴やもめからすは我ごとく独ねかたみつまやこひし
- 125 寄犬恋
人しれすわかちすまむ宿のあたりとかむる犬もせめて
なつかし
またレ
- 126 寄人恋
思ひとりしその偽のならひゆへ人にもひとの猶たのまれ
ぬ
- 127 寄夢恋
ゆきてかよふ夢てふものゝあるならばこよひの心見えさ
らめやも
- 128 寄心恋
うきはさそなあはれなるさへくるしきよ人に心のなへて
ならぬ
にル のレ
- 129 寄言恋
人を思ふ世にふりさらむことのはの君にはしめていはま
ほしきを
- 130 寄鏡恋
思ふ色のいはれぬきはをうつしみせむかゝみもかなや君
か心に
- 131 寄衣恋
こひしとてかへさむとはたおもほえずかさねしまゝの夜
の衣を

寄燈恋

のル右傍

132 さそやけにわれそつれなき待よはる明方の窓にきゆる燈

寄書恋

133 見しそかしかゝることの葉そのふしとさらに涙もふるき

玉つぎ

恋

134 恋といふ名のみはなへてふりぬめり我思ひをはいかゝい

はまし

ナソル

135 恋しきはしのひかたきをいかゝせんうきは身をしるなく

さめもあり

雑

暁

136 雲の色星のひかりも同じ空の長閑になるやあかつきにな

る

竹

137 もゝしきや庭に見馴し呉竹のみしかきよこそ猶あはれな

れ

河

138 よとみしも又立かへりいすゝ川なかれの末は神のまに

風

橋

139 とまる名はなからの橋のはしくゝら朽てのちしも猶残り

ける

旅

140 たひにして妹を恋しみななめをれば都の方に雲たなひけ

り

雑

141 さ夜ふくる窓の燈つくゝとかけもしつけし我もしつけ

し

142 心とてよもにうつるよ何そこれたゝ此むかふともし火の

かけ

143 むかひなす心に物やあはれなるあはれにもあらし燈のか

け

144 ふくる夜の燈のかけををのつから物のあはれにむかひな

しぬる

145 過にし世いまゆくさきと思うつる心よいつらともし火の

本

146 ともし火に我もむかはす燈もわれにむかはすをのかまに

雑

暁

147 かねのをとに夢はさめぬる後にしもさらに久しき暁の床

雑

夕

148 鳥かへるそともの森のかけくれてゆふへの空は雲そのと

けき

- 158 庭の日は木陰も見えずてりみちて風さへぬるみ暮かたき
- 157 山松の梢をわたる夕嵐軒の檜原に声をちぬ也
あつき
- 156 風になひく竹のむら々末見えて夕日にはる遠の山本
山 竹
- 155 花のうちにあそふこてふのも年よさむるうつは猶や
みしかき 夢
- 154 舟もなく筏もみえぬおほ川にわれわたりえぬ道そくるし
き
- 153 たしきをうけつたふへき跡にしようたてもまよふ敷島
の道 述懐
- 152 しのみへきむかしはさりな何となく過にし事のなそあは
れなる 懐旧
- 151 伏見山かと田の末は明やうて松のこなたの空そしらめる
懐旧 田家
- 150 聞侘ぬ枕の山の夜のあらし世のうきよりは住よけれとも
149 軒につく檜原か山に雲をりてくる木すゑに雨をちそ
めぬ 山家

- 165 月影はまたなか空にのとけきをはやとりきこゆあけぬこ
のよは
- 164 ことし又ははかなく過ぎて秋もたけかはる草木の色もすさ
まし やとり木
- 163 ふるさとやちくさか庭の花の秋かきねの露に松虫の声
たけかは 藤はかま
- 162 軒 暮 ほうたる
【風】 ふうりうつむ雪に日数はすきのいはたるひそしけき山陰の
- 161 をりみたれよもの山へに雲もみち野風はけしみ雨になる
暮 紅葉のか
- 160 時にふるなさけのうちも心すむは月にしらむる糸竹の
声 物名
- 159 我もさそあすともなしのけふの世にあればあるてふさ
かにの露 糸ル おもしろき
- 比 はかなき